日本手話学会 2022年3月発行

 **Newsletter** (2022) vol.1

「場の言語学」 研究会 第１回コロキウム

2022年３月13日（日）13時より16時まで、東京学芸大学（東京都）にて、日本手話学会・「場の言語学」研究会第１回コロキウムが開催され、「場の言語学」と手話言語学・手話学や聾教育の連携の可能性に関する議論がはかられた。このコロキウムには岡氏（東京学芸大学）の他に本会会員３名が参加した（手話通訳者2名配置）。

「場の言語学」と手話言語学・手話学や聾教育の連携の可能性に関し、出席者たちが呈示した内容は下記の通りである

岡氏：

■今日の研究会で私から提案できるのは、まず「場の言語学がろう教育にいかに貢献できるか」です。イメージ文法を、外国人の日本語教育とろう者の日本語教育に使えるように整備していくことや、助詞だけでなく、複合動詞、様々な類義表現の違いなどの教授法の開発を考えていくことが挙げられます。

■2つ目に「場の言語学がいかに手話学に貢献できるか」ということです。たとえば、日本語には「主語」はいらない、と私は考えていますが、日本手話には主語はいらないのか（指差しを主語と考えるのか。）また、「ここはどこですか」や雪国の冒頭の文など日本語で場内在的観点で言える表現は、手話ではどのような観点になるのか。場内在的・外在的、事態外在的・内在的といった観点が日本手話にも応用できるのかなど、があります。

X氏：

■descriptive grammar（記述文法）としての日本手話言語とは？巷でよく言われる「日本手話」はprescriptive grammar（規範文法）であり、日本手話ではない手話は「日本語対応手話」であるという位置付けにしている人が多い。そのため、これらの違いを学術的に説明できる人は一人もいない。

■日本手話言語は、日本語の影響をかなり受けているため、複雑になっている。例えば、今年、濃厚接触者、建て直し、センター、彼は学校へ行きます、この講座は初めての方を対象にしていますなど、手話の表し方には2通りある。

■日本手話言語は、漢字や漫画などの影響を受けているため、世界的に珍しい表現が多い。また、きこえる人がよく誤用する手話表現例として、～のように、～のために、～こと、～から～までなど、きこえない人の手話に影響を及ぼしている。

■日本語には「ろう者言葉」がある。助詞を気にしない、ある／いるの違いがわからない、普通やまだなどの語意のズレ違いがあるなどの特徴がある。ろう者は、不特定の人の音声がきこえないため、きこえる人同士で通用する、日本語の言語知識を共有できない。こうして、きこえる人が表す「日本語対応手話」と、ろう者が表す「日本語対応手話」は同じではない。

■日本手話言語の実態としては、手話そのものに多義性があるという手話と、日本語の多義性に頼った手話が混合している。それらの混合度によって、ろう者手話ときこえる人手話の違いが出ている。

■ろう者手話の特徴として、手の向き、手の位置、手の動きが繊細である。例えば、彼らが会う、会いに行く、会いに来る、ばったり会う、一緒になる、ついていくなど、細かい表現ができる。

■東京教育大学附属聾学校卒業生の話として、授業内と授業外の手話をはっきり区別していた。

Y氏：

■聾者の自然な発話・会話にみる指差を、自己中心的領域と場所的領域という概念で再検証できるかどうか。例：「富士山が見える」という意味を持つ∽〈PT3〉〈富士山〉〈PT3〉。〈PT3〉は自己中心的領域にみるものなのか、場所的領域にみるものなのか。

■日本手話にみる鰻文における語順の柔軟性と鰻文形成能：例　「僕は珈琲」　　\*/?「珈琲は僕」、〈PT1〉〈PTcoffee〉　〈PTcoffee〉〈PT1〉

■指差3語構文（〈PT1〉〈PTcoffee〉〈PTwaiter〉）における語順問題を、「場内在的・事態内在的観点」と「場内在的・事態外在的観点」という概念で再検証できるかどうか。

**■**日本語の自動詞・他動詞の日本手話語彙との関連づけ：例〈開く〉〈開ける〉、〈壊れる〉〈壊す〉。日本手話の場合は中動態や自発態を基本形として検証したほうがいろいろなものが見えてくるのではないか。

なお2022年度に「場の言語学と聾教育」というテーマで、手話学セミナーを開く予定である。

（文責：「場の言語学」研究会）